おれは侍だ

柴田錬三郎

中央公論社

おれは侍だ

著　者　　柴田錬三郎
装幀挿画　　中尾　進
昭和 36 年 10 月 1 日印刷
昭和 36 年 10 月 7 日発行
発行者　　栗本和夫
印　刷　　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋 2 ノ 1
電話（561）5921～9番
振替・東京34番
定価 310 円
© 検印廃止

おれは侍だ

運命篇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

朝陽が、昇って来た。

昨夜の雨で濡れた樹々が、葉むらを光らせ乍ら、谷あいを渡って来る風で、ばらばらと雫を降らせていた。

ひくい山が重なりあった地域なので、風は、順番をつくって吹くように、起ったり、止んだりしていた。

その風音は、無常感をさそう侘しさをふくんでいた。

とある松の蔭にたたずんでいる若い武士が、そう感じていた。

昨日、この関ヶ原で起った鯨波や、突撃や、悪鬼のような形相や、槍や刀の閃きや、馬の狂奔や、銃火の炸裂や、呶号や悲鳴や、噴き散る血飛沫は、悪夢であったような気がするのである。

武士は、具足をすてて、小袖の着流し姿になり、太刀を一本だけ、腰に帯びていた。

どちらかといえば、思索型の、眉宇に品のある容貌であった。どこも手負うてはいなかった。流石に、疲労の色を濃く滲ませていたが、眸子の光は、冴えていた。

備前の小さな国の武将の侍臣であるこの若い武士は、主君・朋輩・部下を、昨日、半刻ばかりのあいだに、一挙に喪っていた。

今日からは、徳川の詮議の目を避けねばならぬ落人であった。

にも拘らず、浪人姿になって、なお、この関ヶ原にとどまっているのは、主君の屍骸を捜すためであった。

室戸修理之介は、主君の影武者であった。影武者は、戦場に出るや、主君になり替って闘い、討死する。もし主君が先に討死してしまえば、その遺髪を携えて、国許へ還って、主君の肉親にさし出す任務を持っていた。

修理之介は、その任務をはたす肚をきめていた。そのことに、なんの懐疑も抱いてはいなかった。いったん、肚にきめたことを変えるのは、卑劣であるという考えかたをしていたし、また、きめたことをやりぬく強靱さもそなえていた。

もし、修理之介が、父祖代々の家臣であったならば、この任務をはたす決意に、ふしぎはなかったろう。修理之介は、石田三成が挙兵にあたって、浪人衆を募ったのに応じた一介の兵法者にすぎなかった。たまたま、その備前の小大名に、風貌が似ていたので、乞われて影武者になったまでであった。いわば、やとわれ影武者であった。

大阪方が潰滅し、修理之介の主君もまた三百余名の部下とともに討死してしまった。いま、主君の

屍骸を捜しあてて、遺髪を取って、その国許に届けたところで、なんの意味もなさないことであろう。それよりも、もとの兵法者にかえって、さっさと、何処かへ退散してしまえばいいのであったが……。

修理之介は、しかし、そんな利己主義の考えかたができなかった。自分一人、生きのこったことにさえも、微かなうしろめたさがあった。生きのこったのは、運もよかったのだが、修理之介の腕前が、滅法に秀れていたためでもあった。尤も、手練にまかせて夢中で斬りまくっているうちに、主君とはぐれてしまったのであるが——。

修理之介には、主君が、討死した場所は、ほぼ見当がついていた。

いまたたずんでいる地点と、恰度反対側の山麓に、徳川勢の陣地の馬防柵がある。それにむかって、突撃し、猛烈な銃火をあびて、全滅したのである。

その陣地に、まだ、徳川勢がのこっているかどうかが不明なので、修理之介は、動けずにいるのであった。

——行こうか。

修理之介は、おのれを促した。

二

その陣地には、わずか数十名の一隊がのこっているだけであった。

本隊は、明けがたに、隊伍を整えて、徳川家康がいる本陣へむかって、去っていた。

味方の屍骸収容のためにのこされた一隊であった。しかし、そんな面倒なことはやろうとせず、隊長は、酒樽を前に据えて、真っ赤な顔をしていた。

突然、柵のむこう側で、

「莫迦野郎っ！　なにが、神妙にしろだ！　武士の扱いかたを知らんかっ！」

凄じい呶号が起った。

倒れた柵のあいだから、曳きたてられて来たのは、六尺ゆたかの、逞しい巨軀を持った男であった。泥まみれの半裸姿で、よほどあばれたものであろう、荒縄で、ぐるぐる巻きに縛りあげられていた。

肩と太腿が、斬られて、ぱっくり赤い肉をあけていた。

「なんだ、そやつ！」

隊長は、立ち上って、

「まだ逃げそこなった奴がいたのか」

「逃げそこなったとは、なんだっ！」

捕虜は、喚いた。

「おれは、逃げたりなんぞせんぞ！　柏木新蔵は、北面の武士だぞ！」

「北面の武士が、どうして、石田三成の雑兵集めに応じた？」

「たわけめ！　おれの武勇がとどろいたので、治部少輔殿じきじきに乞うて来たのだわい！」

「ほらを吹きよる」

うしろで、縄をつかんでいる足軽が、云った。

「ほらとは、なんだ！」
柏木新蔵は、ふりかえりざま、足軽へ、べっと唾をはきかけた。
「その武勇とどろく猛者が、どうして、捕えられた？」
隊長は、笑い乍ら、訊ねた。
新蔵は、それにこたえず、
「酒！」
と、呶鳴った。
「捕虜のぶんざいで、贅沢を申すな！」
「何をっ！　酒でもくらわねば、この屈辱に堪えられるか！」
「不覚を慙じろ！……どうやって、捕えた？」
隊長は、新蔵のかたわらに立っている徒士に問うた。
「ねむっているところを、網をかけて、捕えました」
「網か――。何が役に立つかわからん」
隊長は、声をたてて、笑った。
酒樽にかけてあった網を、すてられてある敵味方の槍や刀をひろい集めさせるために、持って行かせていたのである。
「おれは、鶫や雀ではないぞ！　くそ、網などかけ居って――」
「これ！　あまり大きな口はきけないぞ！　大将太刀を、十振もひろっていたではないか。戦場泥棒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

め！」
「いずれ、捲土重来して、徳川家康の首を刎ねる時に必要だと思って、集めたまでだわい！　おのれら雑兵のやからに、北面の武士の志がわかってたまるか！　酒！」
しかし、新蔵が喚けば喚くだけ、周囲には、嘲笑の声が起るばかりであった。
「面倒だ、斬るか」
隊長が、云った。
「面倒で斬られてたまるか！　本陣へつれて行け、本陣へ――」
「本陣へつれて行ったら、なんとする？」
「徳川家康に、柏木新蔵の面魂を見せてやる。おのれら雑兵には、おれの面魂は判るまいが、家康なら判るだろう」
「ほざくな！」
一喝した隊長は、
「よし！　わしが、首を刎ねてやる。あちらへ、しょっ曳け！」
と、云った。
「うぬっ！　おのれらに――」
新蔵は、とびあがって、隊長に、噛みつこうとしたが、ぐーんと縄をひっぱられて、ひっくりかえった。
隊長は、太刀へ、酒を、ぷっと噴きかけてから、柵の外へひきすえた新蔵の、背後に立った。

「北面の武士なら、念仏であろう。となえろ」
「なにをほざくか！……武士らしく扱え、武士らしく！」
「末期の酒か。ははは……よし、飲ませてやろう」
隊長は、部下に、持って来い、と目顔で命じた。
その時——不意に、右手の松林の中から、もの凄い迅さで、一騎、躍り出て来たかとみるや、まっしぐらに、こちらへ疾駆して来た。
「おっ！　何者だ？」
馬上に、小袖を着流した牢人姿をみとめて、怪訝なままに、立っている隊長の前に、あっという間に、到着して、勢いあまって棹立つ馬を、たくみに御しつつ、
「その捕虜を頂戴する」
と、云いはなった。
「何を申すかっ！」
隊長は、太刀をふりかざしたが、斬りつけるいとまも与えられず、白い光芒のような一撃を、頸根へくらって、血煙りあげて、のけぞった。
「新蔵っ！」
室戸修理之介は、片手をさしのべた。
その時もう立ちあがっていた新蔵は、
「すまん！」

と、云いつつ、駆けよった。
修理之介は、ぐるぐる巻きの荒縄をつかむと、巧みに、新蔵のからだを、うしろへ、跨らせた。
徳川兵が、どっと、柵の外へ、とび出して来た時には、もう、騎馬は、十間のさきにあった。

およそ二里あまり疾駆してから、修理之介は、たずなを引くと、ひらりと地上へ降りた。
「新蔵、この馬をやる」
そう云った。
修理之介と新蔵は、曽て、京の吉岡憲法の道場でともに学んだ間柄であった。気性も風貌も太刀筋も、まるっきりちがっていたが、かえって、それが、二人を親しくさせていた。
「お主は、どうするのだ？」
「わたしか。わたしは、もう一度、あの陣地へひきかえす」
「どういうのだ？」
「あそこに、わたしの主君のなきがらがある筈だ。わたしは、影武者だから遺髪を切り取らねばならぬ」
「阿呆なことをするな！　遺髪なんぞ――ばかばかしい！」
「わたしは、ばかげたこととは思わぬ」
「ふうん！」
新蔵は、修理之介の蒼白い貌を、じっと見下していたが、意志をかえぬ男だと知っていたので、

「では、この馬で、ひきかえせ」
と、すすめた。
「いや。お主は、手負うている。わたしは、また、そこいらで、馬をさがす」
「そうか。では、好意をうける。……あ、そうだ。あの陣地から、南へ六町ばかりはなれたところに、炭焼小屋がある。そこの薪木の蔭に、金がかくしてある。お主、取って来てくれ。半分やろう」
修理之介は、たのまれたが、返辞をしなかった。
——むかしから、欲のふかい男であったが……。
その金も、おそらく、昨夜のうちに、るいるいとして横たわっている敵味方の屍骸から、あさったものに相違なかった。
「十日後に、京で会おう。三条河原はどうだ。暮れがたにな」
新蔵は、云った。
「うむ——」
修理之介は、頷いた。

三

昏れると、すぐに、月の光が、視界に満ちた。
修理之介は、その光に濡れて、ゆっくりと、山麓の杣道を辿り乍ら、からだに、屍臭がこびりつい

ているのを感じていた。
およそ百余の屍骸に、修理之介は、手をふれていた。
そして、ついに、主君のなきがらをさがしあてたのである。その遺髪は、懐中にある。
修理之介は、屍骸の貌をあらためているうちに、いくさというものの無慚なおろかさを想わずにいられなかった。
——なぜ、人間は、こうやって、殺し合わねばならぬのか。
孰れの死顔も、陰惨な形相を、膠でかためたように、そのまま泛べて凍てつかせていた。一個だに、死によって、殺し合いの悽愴な気色を消している者はいなかった。
——おれも、死んでいたら、こういう形相で横たわっていたのか。
そう思うと、修理之介は、微かな戦慄を、背すじに匐わせた。
しかし、そのために、修理之介の胸中に、ほんのすこしでも怯懦が生じたというわけではなかった。
「あれか——」
修理之介は、木立をすかして、竹藪ぎわに、小屋をみとめた。
——新蔵のやつ！
修理之介は、そのふてぶてしい面構えを思い泛べて苦笑した。
——これほど欲のふかい奴だったのか。
道場時代でも、なにかといえば、すぐ、金のことを口にした男であった。金が儲かるのであれば、相当な悪事でもやってのけたのであった。

手負い乍ら、屍骸から、金をはぎとってまわったとは、よほどの欲心が働いたしわざと、云わなければならぬ。

修理之介は、そんな金を持つのはいやだった。しかし、たのまれたのである。約束は、はたさなければならなかった。

と——。

修理之介は、足をとめた。

小屋の中から、女の悲鳴が、もれ出るのを、ききとがめたのである。

跫音をしのばせて、近寄った修理之介は、つッかい棒で蔀(しとみ)を挙げた窓から、そっと、内部を覗いてみた。

月明りに、もつれ合う男女の、みだらな姿が浮いていた。

あらわになった白い下肢が、しきりに、男の腰を蹴っていた。

修理之介は、むかむかすると、いきなり、小石をひろって、びゅっと投げ込んだ。

「痛っ！」

男は、女の上からはね起きた。

意外にも、武士であった。

修理之介は、戸口へまわって、板戸をひき開けた。

対手は、刀をつかんで身構えていた。

「恥を知れ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com